甲第160号証

結審にあたって

上田圭子

私が住む町は、関東大震災のあと郊外に移り住む人々のため、農地を１５０坪単位で宅地として分譲されたと、その時土地を購入された方から直接伺いました。

戦争中、中島飛行機の工場の近くにあったため、少しは被害にあいましたが、町は破壊を免れ、現在に至りました。大正の末に現在の地に東京女子大は新宿から移転し、私の家の周りには隣の幼稚園、１分先には本宿小学校、第三小学校、一軒おいたとこは吉祥女子中高校、少し先には立教女学院と文教地区が徐々に形成されてまいりました。

若いお母さん方が、子育てに安心して住める、人の住む町です。それは、お金で買えるものではなく、他の土地に求められるものでもありません。

今、若者たちは生きる道を失い、殺伐とした自己中心の事件が毎日のように報じられております。それは、幼い頃からいろいろ親の都合で、町のコミュニティーからはずれた生活をしていることからきているのではないでしょうか。

利便性のみを追求する社会の考え方、重要文化財である江戸の文化の中心をなした日本橋の上に、縦横にコンクリートの高架道路を作る行政のやり方は、日本の古い文化遺産を否定する最たるものと、私は思います。

道はそこに住む人々が百年、二百年とかけて自然につくられて来たものです。それは、そこに住む人にとって必要な生活道路なのです。人間が住むのに必要なものなのです。

新しく効率がよいとされる道路は、何百年をかけて造られた生活道路より、災害に強いわけではないと思います。直下型地震は、瞬時にして予告なしに町を破壊します。その時、道路上の車はどうなるでしょうか。車は追突・衝突して、交通はマヒし、火災も起きるでしょう。壊れた車が道路を塞ぎ、救急車も消防車も通ることが不可能になることは、関西、東北の地震災害をみれば分かることです。

災害時に、人の命を救うのは、道路ではなくコミュニティーの絆です。

街の桜の大木の下に集う子どもたち、お父さんお母さんたち、おじいさんおばあさんたちは、災害が起きれば、互いに助け合う仲間となります。ここに道路が作られてしまえば、木も家も切り倒され、コミュニティーは破壊されて、災害時には互いに孤立します。災害のためにコミュニティーを破壊して道路を作るなど、なんと本末転倒なことでしょう。

現在の道路は、長い歳月をかけて出来た、人が住むための生活道路です。人のための道です。

新しく道路を造るからそこをどけ、と言われても、私は移転する先もありません。私のコミュニティーを子孫のために守りたい、長い年月をかけて出来た町は、安心安全で平和な町です。地図の上で線引きして、道路をつくると言われても困ります。

きくところによりますと、練馬の予定地は徐々に計画から事業化して、土地収用が進んでいるとのこと。もうすぐ私の町も計画から事業化されてしまうのではないかと、不安と恐怖で毎日を過ごしています。

この平和な町を残すため、「外環の２」を一日も早く廃止していただきたいと願っています。

以　上

２０１５年1月 18 日

武蔵野市

上田